

# 出戸地区の魅力発見ツアー&第2回植物観察会!



1 日時 令和7年6月28日(土)午前9時30分から午後0時30分 ※小雨決行

2 主な行程

①9:30 郷土館集合(日程説明と諸準備:トイレ休憩あり)→②10:00 出戸集会所(二宮尊徳像の話、出戸神社の説明)→③10:20 出戸海岸(海浜植物観察・塩づくりとガス燈森)→④10:50 トイレ休憩(集会所)→⑤11:00 ぼんてん山登山口(馬ハナシ、ノハナショウブの大群落、土塁の見学、ぼんてん山と山伏、御料地の歴史)→⑥12:30 現地解散

## 3 出戸地区の植物たち

(1) 海浜植物:出戸の浜で見られる植物を観察してみよう。



コウボウムギ



ハマエンドウ



ハマニガナ



テンキグサ



オニハマダイコン



ハナナシ

(2) 日本有数のノハナショウブの群落 : 野花菖蒲 アヤメ科 花期6月~7月



ノハナショウブの群落

花茎の高さは40cmから100cmで、赤紫色の花びらの基部に黄色のすじが入るのが特徴。江戸時代、改良されたハナショウブが大流行する。氷河期を生き抜いたハナショウブの原種で、現在、品種改良で種が弱くなっているため、原種から改めて新しく病気に強い種を作り出すことが、求められているようだ。群落の中に「自然変異体」を見つけ、その株を増やすことで、新種を作り出したい。「出戸の女神」として品種登録し、世界に販売していくことで、地域の活性化を図れるのではないかと考えている。種を採って、増やしたい。また、ぼんてん山への登山道の森の中にミズバショウの群落がある。



ノハナショウブ



登山道脇のミズバショウ(葉)の群落



ニッコウキスゲの群落

## 4 出戸地区の魅力

### (1) 出戸の地名の由来

① 広辞苑:「でと」は、「(東北地方で)山の出入り口。転じて、谷川の下流。」と記載。

② 地名語源辞典:「出村、出新田、出町など新しく独立した村」の意味。尾駸村の分家村\*か。

\*分家村:開墾地からみて親村のことを本村、中村、本郷、中郷、内郷、中里、内野、本田。開墾地の子村は分村、枝村、脇村、出村、新郷、新堀、新田、出戸、出店と呼んでいた。

### (2) 出戸の地形について:砂丘と海成段丘と扇状地



出戸地区地図(国土地理院)



出戸地区起伏陰影地図(国土地理院)

海成段丘の上の扇状地からの伏流水が、やがて出戸川となり太平洋にそそぐ。その下流の浜沿いに出戸村が形成され、新館と呼ばれた地域がある。出戸川の河口が蛇行し、三日月湖(古川)が砂を取った跡があり、縄文時代の古い砂丘の上に神社が建てられている。

### (3) 出戸地区の歴史1 : 明治時代イワシ漁

① 新館:太平洋に面した漁村で、明治の22,23年頃、イワシ漁をしに来て、定住した人が多くいた。ムラミという旧家4軒の共同網があり、青塚網・飯島網があった。大正の頃までは浜沿いの新館に集落があった。昭和48年(1973年)に16戸が、山側の県道沿いに移転した。



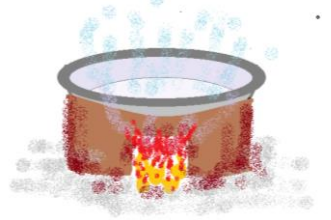
新館があった場所(S40頃)

② 新館の浜とガス燈森:新館には、オヤカタの長屋のような小屋もあってにぎやかだった。その浜辺には昭和4,5年に松を植えた防砂林がある。その近くには塩をつくった場所があり、赤い粘土が残っていた。また、この新館の浜には、ガス燈森という所がある。それは、沖へイカ釣りに行ったときのオカの目印として明かりをつけた所である。棒切れに明かりをつけたものでマジルシといった。



ガス燈森があったところ

③ 中村家の塩づくり:中村勇家の屋号は塩屋である。明治の前から塩を作っていた。以前、塩の供養柱があった。塩を煮る窯は、5尺に8尺の大きさであった。海水を汲んで、大きなタンクに入れ、そのタンクから少しずつ釜に流し込んだ。海水は牛の背中に樽をつけて運んだ。一昼夜かけて1棚(タナ:六尺に六尺の薪)の薪を焚いて2升入りの俵に3俵の塩を取った。薪は、檜木、ハンノキ、ブナの木などを焚いた。塩とりは、春から夏の終わりにかけて天候の良いときにやった。塩は組合を通して出荷し、塩1升と米1升、豆でもやはり1升であった。中村家では、昭和22年から25年までの間、塩を取った。明治前に塩を取った塩釜の跡は、中村勇家の釜の所と同じ場所にあった。



釜での塩づくりの想像図

(4) 二宮尊徳像:出戸小学校の沿革史の中に「昭和50年6月 池の近くに金次郎像建立(上弥栄小より)」という記述から、上北郡で初の女性校長であった江口秀校長が昭和34年10月に上弥栄小学校に寄贈された二宮金次郎像で、昭和50年6月に上弥栄小学校へ移設されたことがわかった。それは、すでに昭和50年3月に上弥栄小学校が尾駸小学校に統合されていたことによる移設であったが、昭和53年4月にその出戸小学校自体が閉校となり尾駸小学校に統合されている。江口校長先生が寄贈された二宮金次郎像は、現在、出戸小学校跡地に残され、大切にされている。



二宮金次郎像

(5) 出戸神社:昭和61年(1986)に納められて「出戸神社縁起略」によると祭神は天照大神で、文久3年(1863)銘の棟札(ムナフダ)があり、伊勢神宮の「天照皇大神宮」の棟札※1 をご神体としている。江戸時代のお伊勢参りの棟札か?また、出戸神社は、漁師たちの進行が厚く、舟絵馬が拝殿にかけてある(昭和63年6月19日奉納)。そして、社殿の両側に出戸牧野記念の牛馬像が立っている。二又神社の馬の銅像と同じもの(昭和53年製造か?)である。



出戸神社(天照皇大神宮)

※1 佐賀にある伊勢神社は 1542 年に神埼市の田手に分霊を勧請。全国で 1 社のみ。

## (6) 出戸地区の歴史2 : 江戸時代から昭和20年ころまでの牧野(馬ハナシ)

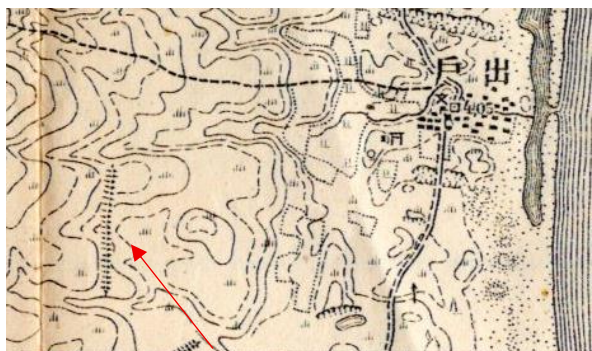
① 馬ハナシ:江戸時代から出戸地区では、「馬ハナシ」が行われていた。この馬ハナシは、明治前から行われていたが、昭和 20 年ころまで行われていた。「オカの天間林、伝法寺、五戸方面から放牧に連れてきた。福岡家には、馬を連れてきた人が 30 人も泊まったりした。5 月に出戸集落に放牧のために入ってくる馬は、2,300頭くらいあった。そのうち種馬は 3 頭くらいいた。4 月は共有地の野火。5 月になると馬の放牧を頼みに来る。頼んだ人は、お盆のころ来て、旧家に宿をとって様子を見ていく。その人たちも盆踊りを一緒に踊った。12 月、馬は雪の降る頃に連れていく。米を持ってきて世話の手間賃としておいていく。しかし、放牧のための野銭は出戸集落へ払っていく。子が生まれるとその野銭も追加して払って行く。」



奉納された牛馬像

※2 参考資料:「民俗資料調査報告書」(昭和51年度)六ヶ所村教育委員会

### ② 野馬除け土手(土塁)について



現在の村の放牧場内に土塁があった。(大正3年の地図)



森の中の土塁

江戸時代の普請によって作られていた土塁の高さは、約 1.8m・幅約 2.2m である。大正3年測量の地図には、現在の村牧草地に土塁があった。登山道の途中にある土塁は、いつの時代のものか?

## (7) ぼんてん山と山伏

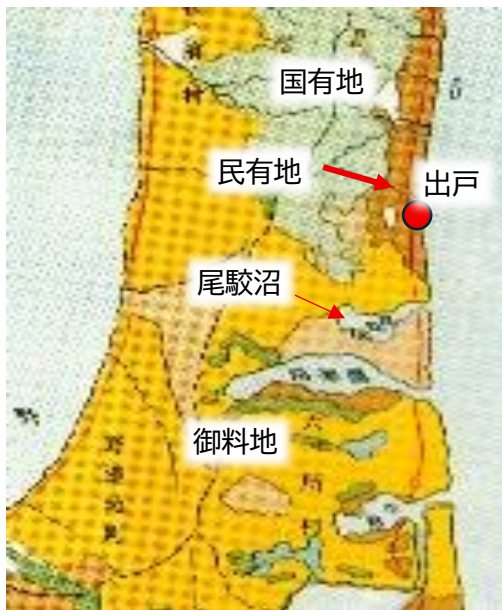


ぼんてん山

戦国時代から寺社が少なかった南部藩内では本山派と羽黒派山伏が活躍していて、六ヶ所村は羽黒派山伏の霞(勢力範囲)であった。山伏が修行の際に、棒の先に御幣をつけた「ぼんてん(神の依り代)」を、この山に奉納したことから「ぼんてん山」と名付けられたと考えられる。現在、このような風習は、秋田県や房総半島で見られる。

実は、慶長 18 年(1613)、江戸幕府が修験道法度を定め、本山派を公式に認めたため、元和 6 年(1620)羽黒派山伏の代表真田式部(法名清鏡)が、これまで通り公式に認めてもらおうと、三戸城の南部藩主利直に面会を申し出たが拒絶され、切腹するという大事件が起きてしまった。その後、六ヶ所村は、羽黒派から本山派山伏の霞となり、山の名前だけが残ったと考えられる。六ヶ所村の山々の名前は、山伏の勢力争いの歴史を物語っているのかもしれない。

(8) 御料地と出戸地区の民有地



大正時代の土地利用図

六ヶ所村の大正初頭(1910)の土地分布では、六ヶ所村の81.5%が、国有地と御料地で、軒下まで国有地だった。山岳部が国有地で、平地は、ほとんどが御料地だった。平地には土塁が多くみられ、馬や牛の放牧場だった。その中で、出戸地区には、民有地(荒地)が広がっていた。

※緑は国有地、黄色が御料地、オレンジが民有地



村宮牧場地図と航空写真(国土地理院)



(9) ぼんてん山の三角点:陸軍陸地測量部と御料局

陸地測量部三角点は、「三等三角点」と刻印されている。御料局三角点の標石の北面に「御料局三角点」と刻印されている。明治22年(1889年)から宮内庁では御料地と民有地の境界を明らかにするための測量と大縮尺図の作成にあたる。参謀本部陸地測量部による青森県内最初の三角点設置は、明治30年(1897年)階上岳から始まっている。ぼんてん山の標石の設置はそれ以降と考えられる。明治24年(1891年)初代御料局測量課長となった神足勝記は、明治32年頃(1899年)以降に六ヶ所村の調査に入り、ぼんてん山山頂に御料局三角点の標石を設置したようである。



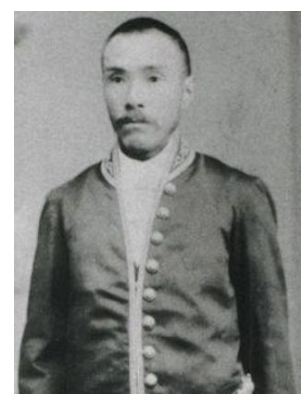
ぼんてん山山頂の陸地測量部三角点と御料局三角点



陸地測量部三角点



御料局三角点



※写真:神足勝記 1854~1937  
「地図測量人名事典」より引用